

# 天の《樂園》<sup>エデン</sup>のその後

——パウル・ツェランのベルリン——

林 志津江

はじめに——詩の解釈あるいは都市を語るテキスト

ユダヤ系ドイツ語詩人パウル・ツェラン (Paul Celan, 1920-1970) の作品について、都市ないし移動を引き合いにして語ることは、さして困難なことではないように思われる。ツェランはいわば旅の一生を送った詩人だからだ。ナチス・ドイツによる強制収容所の収監を生き抜き、詩人としての成功を夢見た二十代のツェランは、一九四五年以降、ブカレストからウイーン、パリという都市を渡り歩く<sup>(1)</sup>。

ツェランは自らの移動や旅の経験を、詩作の動機として積極的に利用した。実際の作品表題やテキスト中にも、ヨーロッパ各地の都市名・地名が随所に登場する。ただしツェランがある都市を舞台に詩を書いたという時、その詩のテキストから読み取れるのは、都市や場所の特徴というより、詩人の遭遇した個

(1)

ツェランはオーストリア・ハンガリー二重帝国内の多言語地域チェルノヴィツツ(チエルナウティフ/チェルニウツィ)で、ドイツ語を母語とする教養層ユダヤ人の家庭で生まれ育つ。チェルノヴィツツはハブスブルグ家の直轄領・ガリツィアから分離した都市ブコヴィーナの首都であり、ツェランが誕生した一九二〇年当時はルーミア王国領だった。第二次世界大戦勃発後、ブコヴィーナはまずソ連軍に

別な出来事の連続に過ぎないようにも思える。「詩のテクストがある都市について語る」というとき、それは必然的に詩の解釈と結びついているのだ。以下に記す読解が、ツェランによる《都市の相貌》の何らかを示すことができるのかどうか？ここから先はひとつのケース・スタディである。

### 楽園という非情都市——ベルリン

古くはプロイセン王国の都であったベルリンは、史上初の統一ドイツ国家であるドイツ帝国の成立（一八七一年）とともに、その首都となる。都市化の進むベルリンは、とりわけ帝政初期のリアリズム文学の時代とワイマール期以降、長編小説の主要な舞台として描かれてきた。十九世紀から二十世紀にかけて、世紀転換期の帝国初期の様相は、例えばフォンターネ（Theodor Fontane, 1819-1898）の『惑い、もぐれ』（*Irrungen, Wirrungen. Berliner Roman*, 1888）に詳しい。またドイツ語で書かれてはいないものの、森鷗外の『舞姫』（一八九〇年）が当時のベルリンの様子を詳細に伝えるテクストであることも付記しておきたい。主人公が恋するエリスの住まいは、「兵舎風賃貸住宅（ミーツカゼルネ）」（*Mietkaseme*）と呼ばれる当時のベルリンにあった労働者住宅の典型である。さらにワイマール時代（一九一九—一九三三年）のベルリンは、第一次世界大戦の敗戦国となった経緯と相俟って、ヨーロッパ大陸上で最もアメリカの影響を強く受ける都市となる。そうした文化円熟期のベルリンを鮮やかに描いているのは、デーブリン（Alfred Döblin, 1878-1957）の『ベルリン・アレクサン

進駐され（一九四〇年）ツェランはルーマニアの国籍を失う。さらにチェルノヴィッツは大戦中、ソ連領からナチス・ドイツ支配下のルーマニア領（一九四一年）、再度ソ連領ウクライナ（一九四四年）へと帰属がめまぐるしく動く。ツェランはチェルノヴィッツがナチス・ドイツ支配下のルーマニア領となった間もなく、ナチス・ドイツの労働収容所に収監された。両親は別の強制収容所で亡くなっている。チェルノヴィッツがソ連領になった後、ツェランはソ連の赤軍派にまぎれて労働収容所から脱出し、大戦終結後にブカレストからウイーンを経て一九四八年七月にパリへ赴くが、その後はフランス人女性との結婚でフランス市民権を取得し、亡くなるまでパリに住んでいた。以下を参照のこと。

ダー広場』(Berlin Alexanderplatz, 1929) や、ケストナー (Erich Kästner, 1899-1974) の『ファービアン——あるモラリストの物語』(Fabian. Die Geschichte eines Moralisten, 1931) のような長編小説だ。当時のベルリンは作家や編集者、劇作家、脚本家といった文芸人がさまざまな物語を繰り広げる磁場とも言える場所<sup>(2)</sup>で、文学と文芸ジャーナリズムが大きく成長した。

そのベルリンを、ツェランは生涯で二度訪れている。一度目はナチス政権下の一九三八年一月九日のことで、一八歳のツェランが大学で医学を学ぶため、当時ルーマニア領だった故郷のチェルノヴィツツからポーランドのクラカウを経由し、フランスのトゥールへ向かう途上のことである。しかし一九三八年十一月九日の夜から翌朝にかけて、ベルリンではナチスによるユダヤ人およびユダヤ人商店の大規模襲撃(ポグロムの夜/Pogromnacht)が起きた。ツェランは十一月十日にベルリンに到着したが、不穏な雰囲気を知ったのか、その後は途中下車することなくフランスまで向かったという<sup>(3)</sup>。当時の体験を、ツェランはその二十年後に「コントレスカルプ広場」(LA CONTRESCARPE, 1963) という詩へと昇華させている。

二度目のベルリン訪問は、冷戦下一九六七年の西ベルリンで、友人が企画した朗読会の招待に答えてのことである。この二度目の訪問体験を機に、ツェランは三篇の詩を書いた。以下にはそのひとつを、筆者による日本語訳とドイツ語によるオリジナルの順に挙げる。

Chalfen, Israel: Paul Celan. Eine Biographie seiner Jugend. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1979. / 関口裕昭「評伝パウロ・ツェラン」慶応義塾大学出版会、二〇〇七年。

(2) エルゲン・シエベラ著 和泉雅人・矢野久訳『ベルリンのカフェ黄金の一九二〇年代』大修館書店、一九九九年/平井正『ベルリン(一九一八—一九二二) 悲劇と幻影の時代』せりか書房、一九八〇年/平井正『ベルリン(一九二二—一九二八) 虚栄と倦怠の時代』せりか書房、一九八一年/平井正『ベルリン(一九二八—一九三三) 破局と転換の時代』せりか書房、一九八二年などを参照のこと。

(3) Vgl. Chalfen (1979): S.78f.

きみは大いに耳をそばだてて横たわっている、  
茂みに囲まれ、舞い落ちる雪に囲まれて。

きみはシユプレー川へ行け、ハーフェル川へ行け、  
肉屋の吊鉤のところへ行け、  
リングを突き刺した赤い小枝のあるところへ行け、  
それはスウェーデンからやってきた——

やって来るのは贈物の載ったテーパー  
それはひとつのエデンの角を迂回してやって来る——

その男は篩ふるいになった、その女は  
漂わねばならなかった、その雌豚は、  
自身のために、誰のためでもなく、各々のために——

ラントヴェーア運河はざわめくこともないだろう  
無が

堰がき止めている。

DU LIEGST im großen Geläusche,

umbuscht, umfloekt.

Geh du zur Spree, geh zur Havel,  
geh zu den Fleischerhaken,  
zu den roten Äppelstaken  
aus Schweden –

Es kommt der Tisch mit den Gaben,  
er biegt um ein Eden –

Der Mann ward zum Sieb, die Frau  
mußte schwimmen, die Sau,  
für sich, für keinen, für jeden –

Der Landwehrkanal wird nicht rauschen.

Nichts

stockt <sup>(4)</sup>

この「かみは横たわっている…」(*DU LIEGST*…, 1968) という詩がベルリンに言及していることは、もしベルリンの街を訪ね歩いたことがあるなら、「シユ

(4) *Paul Celan Gesamelte Werke in 7 Bänden*. Hsg. von Beda Allemann und Stefan Reichert unter Mitwirkung von Rolf Bücher. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2000. Bd. II, S.334.

プレー川」や「ハーフェル川」「ラントヴェーア運河」といった語彙から比較的容易に想像がつくだらう。ベルリンは川と湖と豊かな地下水に恵まれた水の町だ。ちなみにラントヴェーア運河の方は、都市化が進む中で人と荷物の航行がシユプレー川だけでは手一杯になってしまったため、一八五〇年にシユプレー川の南側に並行する姿で完成した、全長十キロ余りの人工河川である<sup>(5)</sup>。

テクストの内部で「きみ」(du)と呼びかけられ、「大いに耳をそばだてて横たわっている」者は、これら三つの「シユプレー川」「ハーフェル川」、そして「ラントヴェーア運河」へ「行け」とうながされる。この三度にわたる呼びかけは、八行目にある「ひとつのエデン」とともに、いにしえのエデンの園を暗示する。旧約聖書の記述によれば、肥沃な土地とされたエデンの園の川は四本に分かれているが、<sup>(6)</sup> 詩のテクストからは、ベルリンもまた三本の河川を軸に、港と堰をまたいで細く入り組んでつなごうとした土地であることが思い出される。

さらにエデンの園という連想は、その下の詩行にある「その男」と「その女」という対語によつて強められる。ただ「その男」と「その女」はそれぞれ「篩(ふるい) になった」あるいは「漂わねばならなかった」ということで、どうやらあまり人間らしくはないか、あるいは生きていない。よつて「その男」と「その女」にアダムとイブを重ねて読むのであれば、この対の形象は、ツェラン流のラディカルな楽園追放劇であるかのようなだ。旧約聖書の伝えるアダムとイブが、楽園を追放になりつつ地上でさまざまな辛苦を重ねるチャンスを与えられているのとは違い、このツェランの詩に登場する二人はすでに少々

(5) Vgl. Strassburger: Jürgen: *Gewässerkarte Berlin*.

Hamburg (Edition Maritim).

2001./Karweil, Jürgen:

*Passagen. Geschichte am Landwehrkanal*, Berlin (Berliner Geschichtswerkstatt

e.V.) 1984.

(6) 旧約聖書の「創世記」二章 (2:10-2:15) は以下の通りである。[2:10]

エデンから一つの川が流れ出ていた。園を潤し、

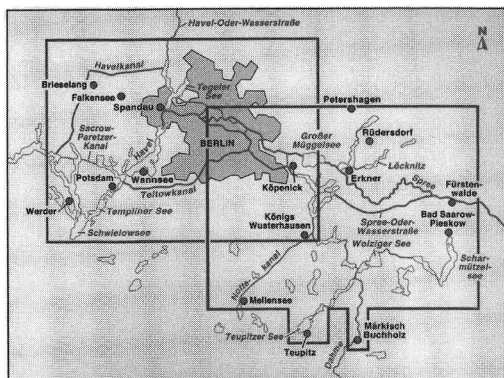
そこで分かれて、四つの川となっていた。[2:11]

第一の川の名はピシヨンで、金を産出するハビラ

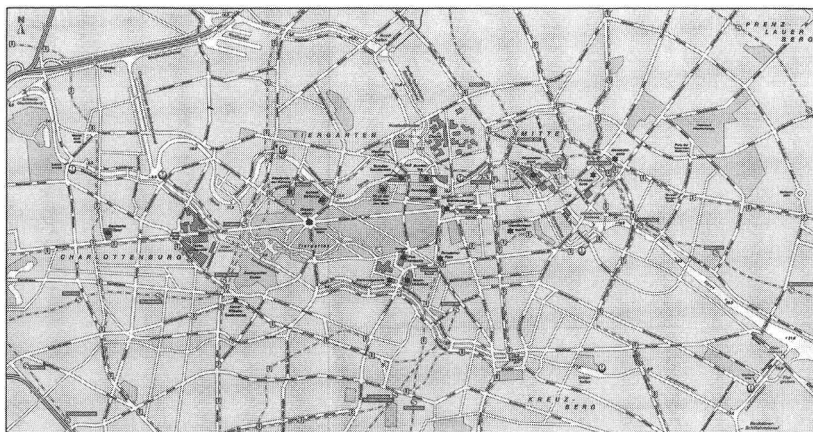
地方全域を巡っていた。[2:12] その金は良質で

あり、そこではまた琥珀の類やラピス・ラズリを

産出した。[2:13] 第二の川の名はギホンで、ク



図版 1 ベルリンとその周辺：ベルリン東部に流れる 2 本の川の上流（北）がシュプレー川、下（南）がラントヴェーア運河。シュプレー川はベルリン西部シュパンダウ（Spandau）付近でハーフェル川（湖）と合流する。



図版 2 ベルリン中心部：地図中央を左右（東西）にまたがって流れているのがシュプレー川、その下方（南側）にラントヴェーア運河が流れている。

〔図版 1、2 ともに Strassburger (2001): Gewässerkarte Berlin 所収〕

シュ地方全域をめぐっていた。〔211〕第三の川の名はチクリスで、アシユルの東の方を流れており、第四の川はユーフラテスであった。〔212〕主なる神は人を連れてきて、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。（日本聖書協会編「聖書新共同訳旧約聖書続編つき」一九八七—一九八八年、二—三頁）。

絶望的な事態に見舞われている。そして「肉屋の吊鉤」の「肉」と「リンゴを突き刺した赤い小枝」の「リンゴ」は、その下の詩行にある「エデン」という語と結びつく。知恵の樹の実を食し、無垢を失ったことが、アダムとイブの原罪ではなかったか。ちなみに「肉屋の吊鉤」(Fleischerhaken)と「赤い小枝」(Äppelstaken)の二語は、ドイツ語の *-haken*、*-staken* の韻でも対を成している。こうして「きみ」は、一方でベルリンの歴史の流れを象徴する川を見やりながら、ヨーロッパ文明のうちで最も古い川のイメージに遭遇しつつ、「篩(ふるい)になった」あるいは「漂わねばならなかった」穏やかでない対の男女と出会う。と同時に目撃者である「きみ」も、その肉ないし快樂のある場所、知恵の実たるリンゴのもとへ「行け」といざなわれる。以上から、創世記に由来する「エデン」とそこからの追放というモチーフは、ツェランの詩において、普遍的でありながら緊迫した形象になっている。

ところでこの詩については、成立の経緯について非常に詳細な報告がなされている。そもそも成立のきっかけとなったベルリン訪問は、友人で詩人のヴァルター・ヘレラー (Walter Höllerer, 1922-2003) と、生涯にわたる親しい友人で比較文学者のペーター・ゾンディ (Peter Szondi, 1929-1971) がそれぞれ企画した朗読会の招きに応じたものだ。とりわけ後者のゾンディは、ツェランの滞在中に多くの時間をともにしたこと、遺作となった未完のエッセイ『エデン』(Eden, 1971)<sup>(7)</sup>で、自ら経験した出来事をつまびらかに語っている。

ツェランは、ヘレラーが主催する「文学コロキウムベルリン」(Literarisches

(7) Szondi, Peter: *Eden*. In:

*Celun-Studien*. Frankfurt a.M. (Suhrkamp) 1972. S.

113-125.



Colloquium Berlin) の朗読会の会場である、芸術アカデミーの宿舎に泊まっていた。この客室の壁には大きな窓ガラスがはめ込まれていて、ツェランの泊まった部屋からは、建物の前にある動物園の茂みが一望できた。芸術アカデミーの前には、イギリスの彫刻家ヘンリー・ムーア (Henry Moore, 1898-1986) による「横たわる」女性像の彫刻が今も置かれている<sup>(8)</sup>。ちなみに横臥像は彫刻家ムーアの代名詞だ。またツェランが当時、妻と息子に宛てた手紙によると、ツェランのベルリン滞在中に激しい降雪が続いていたのも確かなようだ<sup>(9)</sup>。これらの情報は詩の冒頭第一詩節にすつかり当てはまる。

第二詩節、四行目の「肉屋の吊鉤」は、友人に連れられて市内の中心部に程近いプレッツェンゼー記念館を訪れた体験がもとになっているらしい。この記念館はナチス・ドイツによる強制収容所のうち、ドイツ人政治犯が収容され、一五〇〇人も人命が奪われた場所だ。そして「肉屋の吊鉤」という形象は、処刑室にある梁状の横木にぶら下がった五つの鉤がヒントになったと考えられ、これは現在も建物の一部とともに見ることができるとも考えられる。その鉤はむろん処刑者を吊るすためのものだが、ツェランが詩に「肉屋の吊鉤」と書いたのは、次行の「リングを突き刺した赤い小枝へ」とつながり、「肉(屋)」を次詩節にある「エデン」という語の歓喜する快楽性と結び付けるためだろう。

またツェランがベルリンに滞在したのは、一九六七年十二月十六日から二九日までの約二週間である。それゆえツェランは友人とともに、プレッツェンゼー記念館を見物した後、アドヴェント(待降節) からクリスマスMASの時期にか

(8) 関口裕昭『パウル・ツェランへの旅』郁文堂、二〇〇六年、九五頁。

(9) Vgl. Paul Celan - Gisèle Celan-Lestrange Briefwechsel: Mit einer Auswahl von Briefen Paul Celans an seinen Sohn Eric. Aus dem Französischen von Eugen Helmlé. Herausgegeben und kommentiert von Bertrand Badiou in Verbindung mit Eric Celan. I. Band. Memmingen (Shirckamp) 2001, S. 518.

けてドイツ各地で開催されるクリスマス市 (Weihnachtsmarkt) のひとつを訪ねている。クリスマス市には通常、ドイツとその周辺各地に伝わるクリスマス用の飾りやお菓子、食べ物や飲み物売る小さな出店が立ち並ぶが、ツェランはスウェーデン製の品を売る出店の、赤く塗られた小枝でできたアドヴェントの輪飾りにしばし目を留めたいらしい。その輪飾りにはろうそくと「リンゴ」がついていたという。クリスマスが贈物の季節であることを知っていれば、このエピソードは第三詩節の冒頭「やってくるのは贈物の載ったテーブル」にもつながる<sup>(10)</sup>。そして「リンゴ」はむろん「エデン」とたやすく結びつく。さらに「リンゴの小枝」(Äppelstaken) という語は興味深い。この詩のテクストで「リンゴ」を意味する Äppel (エッペル) という綴り方は典型的なベルリン方言のひとつであり、標準ドイツ語 (高地ドイツ語) では Apfel (アプフェル) と綴る。ツェランは滞在中、友人たちと食事や酒の席で、ベルリンの方言について散々語り合ったという<sup>(11)</sup>。

第三、四詩節は、ツェランが滞在中にソンデイから借りた一冊の本と、ツェランがベルリン滞在中にしょっちゅう車で行来した、宿舎とソンデイの自宅との間にある一軒の建物についての情報と一致している。ツェランが借りて読んだのは、『ローザ・ルクセンブルクとカール・リープクネヒトの虐殺。ある犯罪の記録』(Der Mord an Rosa Luxemburg und Karl Liebknecht. Dokumentation eines politischen Verbrechens, 1967) と題する書物である。ルクセンブルク (Rosa Luxemburg, 1871-1919) とリープクネヒト (Karl Liebknecht, 1871-1919) とは

(10) ドイツ語圏では、アドヴェントの時期に四本のろうそくのついた「アドヴェントの輪飾り」を楽しむ風習が浸透している。輪飾りには四本のろうそく(たいていは赤い)がついており、計四回のアドヴェントの日曜日がやってくるごとに、人々はろうそくにひとつずつ灯りを点してクリスマスの日の到来を待つ。

(11) 関口『評伝 パウル・ツェラン』三九六頁。

二人の左翼革命家は、ドイツ義勇軍の手にかかり、一九一九年一月十五日に落命する<sup>(12)</sup>。彼らは義勇軍近衛兵団の騎兵・射撃兵分団の本部として用いられていた「エデン」という名のホテルに連行されて殺害され、死体は建物からほど近いラントヴエーア運河に投げ込まれた。そしてベルリン滞在中のツェランとソンデイは、それから四五年以上経過した一九六七年の十二月、かつて二人の革命家が死ぬ間際の数時間を過ごしたその建物が当時と同じ「エデン」(Eden)という看板を掲げる脇を、車で通りがかるのである。車中のツェランとソンデイは、殺された二人の記憶につながるホテルの名が、依然このように豪華な建物の名前として残されている皮肉について語り合ったという<sup>(13)</sup>。したがってこの報告を読んだ後、詩の六行目「それはひとつのエデンの角を迂回してやって来る——」にある「(ひとつの)エデン」は、創世記に由来するエデンの園のみならず、その名に歴史を刻んだ建物を暗示する語となる。

そうなると次の四詩節の「その男」と「その女」からもまた、殺された二人の革命家が容易く連想され、この二詩節はそのツェランが読んだ本の内容とまるで合致している気がするというものだ。しかもツェランが読んだ著作によると、証言者は処刑人から「ドクター・リープクネヒトはもう節のごとく穴ぼこだらけに突き刺されたも同然です」、ルクセンブルクについては「老いぼれた雌豚はとつくに水の上を漂っています」という報告をそれぞれ受けたという。また「雌豚」(Schwein)という語にはユダヤ人女性の蔑称として使われてきた経緯があるので、証人は当然、ルクセンブルクがユダヤ系ポーランド人であること

(12) 林健太郎『世界各国史  
3) ドイツ史』山川出版  
社、一九九三年、三七六  
頁。

(13) Vgl. Szondi(1972):  
S.116-119.

を知ってそう述べたのだろう。これらは詩の九、一〇、一一行目「その男は飾（ふるい）になった、／その女は漂わねばならなかった、その雌豚は、／自身のために、誰のためでもなく、各々のために——」に反映されている<sup>(14)</sup>。この詩行には「雌豚」、すなわちユダヤ人であり、なおかつ「各々のために」闘った革命家ルクセンブルクに対する共感をかいま見ることができ、ツェランと同じくユダヤ系で東方（ハンガリー）の出自を持つソンデイもまた、ツェランのその共感を大いに共有できる人物であったはずだ。

ソンデイは自らの報告の傍ら、彼が見た一部始終が詩の読解に逐一還元されるべきではないことを強調する。詩の成立にとって決定的なのはベルリンに滞在したということだけで、テキストに表れるあらゆる要素は詩人の恣意的選択に過ぎないのだ<sup>(15)</sup>。しかしこうしたソンデイの忠告を待つまでもなく、私たちにベルリンに「ひとつのエデン」が存在していること、そこは「エデン」ではあるものの、創世記にある「エデンの園」とは様相が違うという奇妙なメッセージが読み取れていたのではなかったか。ソンデイによる報告は、このイメージをもう少し分かりやすいものにしてくれる類いのものだろう。つまり天の楽園は、同時にこの世の非情な歴史の舞台でもありうるのだという風に。それは多分そうなのだろう。ソンデイは別の箇所、詩人ツェランが人口に膾炙することとなった詩「死のフーガ」(Todesfuge, 1945) に繰り返し登場する「明け方の黒いミルク」(Schwarze Milch der Frühe) とどう自己撞着的形象を引き合いに出しながら、「ツェランにとって善は同時に悪であり悪もまたいつも

(14) Vgl. ebd.

(15) Vgl. Szondi(1972): S.123.

善をも含んでいるものだった」と指摘する。<sup>(16)</sup>

ソンデイの報告を聞いた後では、「肉屋の吊鉤」と「リングを突き刺した赤い小枝」の組み合わせが、ナチス・ドイツによる蛮行・虐殺とクリスマス飾りという、不謹慎な印象の組み合わせに変わってしまう。だがこの組み合わせはまさに、善は同時に悪であり、悪もまたいつも善をも含むという、ソンデイが指摘するようなツェランの根本認識を彷彿とさせる。この二つは対立する二つではないのだ。この世の非情な出来事のひとつがベルリンで起こった。ベルリンで二人の革命家が無残に殺された場所は、奇妙にも「エデン」(Eden)という名を冠し、今なお豪華なアパートでもあり、残酷な出来事の全てをまた、男と女である人間が引き起こす歴史の常である。そしてあの二人の革命家の殺害劇は何より、首都ベルリンに存在したワイマール共和国の光と影、さらにはナチス・ドイツの醜悪さと蛮行を強烈に連想させる。斯様にツェランが描き出したこのベルリンは、偶然の結果見出された事柄の連続でありながら、ベルリンを樂園でもあり地獄でもあるような何処かとして際立たせる。アダムとイブが追放されてから遙か後、かつての「エデンの園」は、その言葉に秘められた両義性をさらに先鋭化させ、「ひとつのエデン」として、自身の反像としての非情な姿を伴ってのみ現前しうるようなあり方で、ツェランの詩の元へと再び到来する。

(16) Vgl. Ebd.

## 結び——相反するものの隣接、異質なものを併せ持つ世界

善が同時に悪であり、悪が同時に善でもあるというあのツェランの根本認識は、世界が善と悪に分かたれるという単純な見方とは全く異なっている。この詩の最後の二行を見ておこう。ふたりの革命家が投げ込まれた「ラントヴェーア運河」について、詩の語り手は「ざわめくこともないだろう」と述べる。抵抗するものも、革命の挫折に対して異議申し立てする者も、もはや存在しないというかのように。詩人もまたそれをよく知っていた。それはツェランの認識の内部で、アウシュヴィッツ以降の世界に必然の理であり、また詩人がベルリンという都市に注ぐ眼差しでもある。

そしてベルリンで起こった固有の事件、ある都市で目撃されたさまざまなモチーフは、一方で詩のテクストにおいて単なる選択の結果を反映しているに過ぎないが、と同時にそうした出来事の数々こそが、今あるベルリンという都市の本質を形成しているのも道理である。ある都市が斯様な出来事を経なくては、ツェランがかの土地であるような何かを見聞きしなければ、本論で行った読解のいろいろは不可能なのだから。ツェランのこの詩は、ベルリンのみならず世界のあらゆる都市が、それぞれ比類なきやり方で、さまざまな出来事を経ていると存在していると言いかのようだ。

しかし最終詩行にある「無が／堰き止めている」はどうだろう。善が悪でもあり、悪が善でもあるのは恐ろしく不愉快だ。しかしそのような世界の内で、

善が悪とは無縁ではいられない世界の中で、無という喪失が支配する流れの内では、せめてあらゆる関係が完全に断ち切られないことを、ツエランは絶望の淵に望んでいたのではないか。善と悪が斯様に不可分であるなら、その世界の内部で、善と悪がそれぞれの異質さと向かい会うことのできる契機が存在していることを。そして先にも言及した、ソンデイによる主張もまた然りである。

彼は自らの見た出来事を詳細に報告しつつ、その一部始終が詩の読解に逐一還元されるべきではないとも語っていた。これは矛盾した希望ではない。ソンデイのエッセイは未完の遺作であり、その意味で最終的に意図された結論が何だったのかは推測の域を出ないが、もしその推測が許されるのであれば、ソンデイが善と悪という文脈で考えたのはおそらく、詩のテクストにあくまで忠実な読解——伝統的なドイツ流文献学的手法——と、自らの経験した出来事の語り、相互に行き交う可能性を求めてのことではなかったか<sup>(17)</sup>。

ツエランの書いた詩は、ただただ詩人の個人的経験を経て生み出されたものだ。それは善が悪と隣り合わせにあるように、常に異質なものの組み合わせを内包した何かであり、ツエランの詩もまた、ツエランの経験とは全く異なるそれとして、私たちの眼前で展開する。実際、私たちはツエランのテクストに、ツエランが言い含めた意図を必ずしも読み取ったりはしない。詩人もまたそれを解っている。しかしそのようなツエランの詩は、それでいてなおかつ、共感とともに誰かによって受け入れられる瞬間を絶えず待ち望んでもいるだろう。ツエランにとつてのベルリンは、その絶望にも似た希望を託しうる場所でも

(17) ソンデイの『エデン』執筆当時、(西)ドイツ文学・文献学研究の現場では、「作品内在的解釈」と呼ばれる、解釈を徹頭徹尾テクストの字義に沿って導く一九五〇年代以来の手法が、未だ大きな影響力を發揮していた。「作者の年代記と書かれたテクストに関連性を見出す解釈は恣意的で素材にすぎない」という作品内在的解釈の主張は、(西)ドイツ国内のドイツ文学・文献学研究が、ナチス・ドイツの過去と向き合う必要性を不問にする最大の根拠となった側面もあり、この問題に関しては現在まで多数の批判的研究が行われている。以上について、背景をふまえてつづ言及する日本語で書かれた一般書としては、例えば三島憲一の著作『戦後ドイツその知的歴史』(岩波書店、一九九一年)などを挙げておきたい。

あつたに違ひなう。

【参考文献】

【第一次文献】

*Paul Celan Gesammete Werke in 7 Bänden*. Hrsg. von Beda Allemann und Stefan Reichert unter Mitwirkung von Rolf Bücher. Bd.II. Frankfurt a.M. (Suhrkamp) 2000.

*Paul Celan. Die Gedichte*. Kommentierte Gesamtausgabe in einem Band. Herausgegeben und kommentiert von Barbara Wiedemann. Frankfurt a.M. (Suhrkamp) 2005.

【第二次文献】

*Paul Celan - Gisèle Celan-Lestrange Briefwechsel*. Mit einer Auswahl von Briefen Paul Celans an seinen Sohn Eric. Aus dem Französischen von Eugen Helmlé. Herausgegeben und kommentiert von Bertrand Badiou in Verbindung mit Eric Celan. 1. Band. Memmingen (Suhrkamp) 2001.

Bohler, Karl Heinz: *Provinzialismus : ein physiognomisches Panorama*. München/Wien (Carl Hanser) 2000. (カール・ハインツ・ホーラー著、高木葉子訳『大都市のない国 戦後ドイツの観相学的パノラマ』法政大学出版局、二〇〇四年。)

Chalfen, Israel: *Paul Celan. Eine Biographie seiner Jugend*. Frankfurt a.M.



- (Suhrkamp) 1979.
- Karwelat, Jürgen: *Passagen. Geschichte am Landwehrkanal*. Berlin (Berliner Geschichtswerkstatt e.V.) 1984.
- Literarisches Colloquium Berlin(Hg.): *Berlin : über Damm und durch die Dörfer*. 382 *Fotografien von Renate von Mangoldt ; zwölf Essays von Walter Höllerer*. Berlin (Literarisches Colloquium Berlin) 1978.
- Reich-Ranicki, Marcel: *Über Ruhestörer : Juden in der deutschen Literatur*. München (R.Piper) 1973.
- Reich-Ranicki, Marcel: *Engagement: zur deutschen Literatur der siebziger Jahre*. Stuttgart (Deutsche Verlagsanstalt) 1979.
- Schebera, Jürgen: *Damals im Romanischen Café. : Künstler und ihre Lokale im Berlin der zwanziger Jahre*. Leipzig (Edition Leipzig) 1988/2005. (ユルゲン・シエベラ著、和泉雅人・矢野久訳 (『ベルリンのカフェ 黄金の一九二〇年代』大修館書店、一九九九年。)
- Szondi, Peter: Edén. In: *Celan-Studien*. Frankfurt a.M. (Suhrkamp) 1972.
- 飲吉光夫『傷ついた記憶 ベルリン、パリの作家』筑摩書房、一九八六年。
- 飲吉光夫編訳『ベルリン・レミニセンス』思潮社、一九九二年。
- 関口裕昭『パウル・ツェランへの旅』郁文堂、二〇〇六年。
- 関口裕昭『評伝パウル・ツェラン』慶応義塾大学出版会、二〇〇七年。
- 林健太郎『世界各国史3』ドイツ史』山川出版社、一九九三年。

日本聖書協会編『聖書新共同訳旧約聖書続編つき』一九八七—一九八八年。

平井正『ベルリン（一九一八—一九二二）悲劇と幻影の時代』せりか書房、一九八〇年。

平井正『ベルリン（一九二二—一九二八）虚栄と倦怠の時代』せりか書房、一九八一年。

平井正『ベルリン（一九二八—一九三三）破局と転換の時代』せりか書房、一九八二年。

三島憲一『戦後ドイツその知的歴史』岩波書店、一九九一年。

【図版】

Strasburger, Jürgen: *Gewässerkarte Berlin*. Hamburg (Edition Maritim) 2011.